

堀 源一郎先生の思い出

田 中 済（天文学教室）

堀先生は昭和28年新制大学最初の卒業生として東京大学理学部物理学科（天文学課程）をご卒業後、大学院にお進みになり天体力学（おもに月運動論）のご研究を続けられた。私が天文学教室に進学したのが昭和35年であるので、残念ながらこの間のことは存じ上げない。当時天文学教室は麻布飯倉にあり、バラック建ての火の気のない教室で唯一の電動式計算機モノローを使って夜遅くまで計算をされていた由である。

私が堀先生とお近づきになったのは講義においてであったが、先生の天体力学の講義はきわめて明快でしかも新鮮であった。新鮮さの極地といえ、講義中に新しいことを思い付かれて考え考えしながら講義をされたこともあった。このことは最近の講義でも一貫して変わらず、土曜日の午後というきわめて悪い時間帯にもかかわらず天文学科以外を含む多くの学生を集めておられた。先生のお得意はかの難解なる四元数で、これを何人の学生が完全に理解しえたであろうか。

以来30年以上にわたってお付き合い願っていることになるが、私が専門として観測天体物理学という先生と異なる分野を選択した関係で、先生との深いつながりは学生時代に集中してしまう。天文学以外の関わりで最も深かったのはオーディオ趣味である。昭和35年は日本でもやっとステレオ・レコードが手にはいるようになった時期で、レコード一枚が2800円もした。学生には何カ月か小遣いを貯めなければ買えない値段である。堀先生はアメリカ、ニュー・ヘヴンのイエール大学から戻られたばかりで、アメリカではレコードがきわめて安価に手にはいるという話を聞かされてうらやましく思った。先生は音楽（おもにクラシック）の中身についてもうんちくが深く、とくにブラー

ムスがお好きだった。ブラームスのクラリネット五重奏曲は、有名なモーツァルトのそれ以上によい曲であることを教えてくださったのも先生である。先生を拙宅（実は私の親の家）にお招きして、ステレオをお聞かせしたことがある。酒豪の先生は酒量上がるにつれ交響曲第4番から始まって、ブルーノ・ワルターの演奏する4つの交響曲をすべて聞かれ、さらに深夜に至ってもう一度聞きたいといわれたのには参った。

何年かは定かに記憶していないが、よりによってクリスマス・イヴに秋葉原にスピーカを買いに行くからつきあえといわれる。当時評判のパイオニア製コアキシャル型をかなり大きな箱にいれてもらったのはよいが、さてお宅に運ぼうという段になってその重いこと重いこと、一つずつ（ステレオ用である）担いで人混みの中をあっちにふらふらこっちにふらふらと歩いてやっと通りまで運び出した。それからがさらにいけない。タクシーが捕まらない。別の通りまで出かけてやっと捕まえてきたら、スピーカを見てタクシーの運転手いわく、「これは貨物自動車じゃないんだぞ。」

遊びだけではなく、天文学でもいろいろお手伝いさせていただいた。当時の学会での発表はビラを使うのが主流であった。よく発表の前日にかつどんをご馳走になってビラを用意するお手伝いをしたが、このことを通じて天体力学にかなりの興味を沸かせていただいた。今のように計算機が自由に使える時代ではなく、電子計算機といえ数えるほどしかなかったが、私は電気試験所（今の電総研）にあったマークIVという計算機がかなり自由に使えたので、これを堀先生の理論に基づいた計算を行なった。特に多項式を係数とする三角級数の自動展開のプログラム（機械語）のおかげ

で天体力学の成績は優であった。

先生の趣味（道楽）の最大のものは古本を集めることで、学会などで地方に行かれると必ず古本屋を漁られた。そして東京に戻ると重い小包が到着するという次第である。これが部屋の中を次第次第に占領し、今では足の踏み場もないほどの中で研究しておられる。文房具なども変わったものを集められるのがお好きで、新製品に目がなく、しかも昭和一桁生まれの常として古いものはもったいなくてお捨てにならないので、カメラや電卓は何十台も持っておられる。

先生が酒豪であることは前にもふれたが、タバコも大変お好きであった。ところが何回目かの渡米中に持病の足の血栓症が悪化され、かなり危険

な手術をされて以後、タバコはぱったりとお止めになった。血栓症はかなり痛い病気だそうで、渡米前も歩くのに難儀をされていたが、今ほどタバコの害が叫ばれない頃にあれほどお好きなタバコをやめられたのはすごい精神力だと感心した。もっともお酒の方は血行をよくするという理屈で続けておられるが、昔ほど無茶飲みはされないようにお見受けする。

なにやら自分本位に思い出を語ってしまったようだが、先生のお人柄を知る一助にでもなればと期待する次第である。先生がこれからもお健やかに研究を続けられるようお祈りして送りの言葉としたい。